



今、なぜガンディーか

概ね月1回、「今夜はご機嫌@銀座で農業」なる一般市民を対象にしての小さな塾を銀座近くで開いている。ここで先般、香川大学の石井一也教授の「ガンディーの文明観と理想の村落像」をテーマとする話を伺った。ガンディーの近代文明批判やその思想の現代的意義等を中心とする話であった。偉人として祀られ、「非暴力」の言葉は残りながらも、ほとんど忘れられかけた存在を見つめなおす、いい機会となった▼石井教授は最後に「地球は、すべての人々の必要を満たすのに十分なものを提供するが、すべての人の食欲を満たすほどのものは提供しない」というガンディーの言葉を強調するとともに、「ポスト近代」の経済学が「成長経済を支えてきた利己心、資本蓄積、市場メカニズム、国家主導の開発など一連の「近代」の諸価値の対極に向かいながら、同時に「近代」において未曾有の規模に増大した地球人口を養うというきわめて困難な」課題を有している、として締めくくられた▼ガンディーは非暴力を抵抗の手段として位置付けるだけでなく、手紡ぎによる綿布の手織りをチャルカー運動として、綿布の自給化・国産化を推進し、これを独立運動の足場としていったことをあらためて認識させられた。同時に縮小経済の道筋をどう描くことができるのか、あらたな「公案」をいただいたと受け止めている▼市民参画型農業なり流域自給圏づくり等について考えている折に、渡辺京二著『荒野に立つ虹』の中の一文が目飛び込んできた。

「生活の質素さ簡素さこそ、人間に行動の自主性を確保する基礎であることを、何びとよりも明確に見抜いたのはかのマハトマ・ガンジーである。」経済はあらためて人類史とともに考え直していくことが不可欠なようだ。

(土着菌)